

風の輪

寄稿

行動の意味を理解する —意味理解とコミュニケーション—

武庫川女子大学
教授 松端克文

生きにくさの背景

最近の若い人たちの間で、自らのことを「コミュニケーション」と称する人が増えている。単に「KY(空気が読めない)」というのではなく、そのことを自覚している人がそう自称しているようである。経団連の調査では2004年より、

企業が求める人材のトップは「コミュニケーション能力」が続いている。そしてこの間、「(新型うつ)や、「発達障害」の診断を受ける人が増えていることをふまえると、私たちの社会は、とても生きにくくなっているのかもしれない。

作られてきた行動障害

障害者福祉の現場においては、「(強度)行動障害」のある人の支援のあり方が大きな課題となっている。しかし、そのような先天的な「障害」があるわけではない。そうした行動はその人が今日に至るまでの間に、不本意ながらも身につけてきた行動パターンなのである。「行動障害はつくられてきた」のである。だから支援では、その人をしっかりと受け止めて、信頼関係

を形成し、本人の「納得」と、「本人のペース」で生活できる環境を整えていくことができるか否かが重要となる。

「なぜ？」を探る大切さ

そして、「なぜ、そうした行動をとるのか」という原因(なぜ?)を、乳幼児期から今日に至るまでの人生全体を通して、親との関係や学校での状況などもふまえながら、本人に寄り添ってそのときどきの不安や不満、苦悩などを受け止め、「なぜそうした行動をとらざるを得ないのか」ということを探っていく姿勢が重要となる。

また、その行動の前後で、

なにがもたらされているのか(行動の機能はなにか?)を分析することも重要である。その行動により、嫌なプログラムに参加しなくてもよくなるのか、支援者がかまってくれるようになるのか、暇な時間を埋められるのか。そのときの前後の状況を把握し、その行動の意味を分析するのである。

このように、時間軸を長くとって行動の原因を探っていくことと、時間軸を短くして行動の機能を分析することを組み合わせ、本人の「行動の意味」を理解するように努め、具体的な支援上の課題を明確にし、チームとして計画的に支援していくことが必要となる。水仙福祉会では、こうした取り組みを「意味理解のアプローチ」として整理、実践している。とても大切な視点だといえる。



発達講座で講演される松端教授

松端克文：武庫川女子大学文学部心理・社会福祉学科教授。専門は障がい福祉分野を含めた地域福祉論。著者「地域の見方を変えろ」と福祉実践が変わる「コミュニケーション変革の処方箋」ミネルヴァ書房、2018。「障害者の個別支援計画の考え方・書き方」日総研、2004(増補改訂版近日発売予定)。